

年間第三十一主日

2011.11.5

マタイ 23・1-12

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

この数週間の主日ごとの福音は、何とかしてイエスを陥れようとするイエスに敵対する人々とイエスとの間で交わされた、息詰まるような論争を伝えていました。結局はイエスを十字架の死に追いやったこれらの人々が、どのような人たちであったかを振り返ってみれば、エルサレムの神殿の祭司長たち、ユダヤの社会の長老と呼ばれている人たち、サドカイ派やファリサイ派といった、当時のユダヤの社会の宗教界を二分する党派に属していた人たち、そしてその中でも指導的な立場にあった律法の専門家たちであったことが分かります。これらの人々の多くは、ローマ帝国の支配下でありながらも、宗教的分野においてはなおその独立性が認められていたユダヤ社会の最高権力機関であった、サンヘドリンと呼ばれる最高会議のメンバーであったのです。

これらの人々が、何故イエスと敵対し、イエスを陥れようとして公然とイエスに論争を挑んだかといえば、ガリラヤのナザレというような名も知られていない土地の出であるイエスが、伝統的な律法の教えを無視し、それに挑戦するかのような行動を伴う新しい神の教えを言い広め、奇跡の業を行って民衆の心を捉え、あろうことか、その人々を引き連れてエルサレムの都に乗り込んで、聖なる神殿の境内で乱暴狼藉を働くに至ったからです。彼らは、何とかして熱狂的にイエスに心酔している民衆の心をイエスから引き離そうとして、人々の前でこれらの論争をイエスに対して仕掛けたのです。

そのような、人間の権力闘争の本能がむき出しになった論争の中で、今日の福音は、その論争のありさまを固唾を呑んで見守っていた人々へのイエスのことばを伝えていきます。そしてそれは、今日の福音を聴くわたしたちへのイエスのことばでもあります。

今日の福音の律法学者やファリサイ派の人々に向けられたイエスのことばは、少しでも身に覚えのある人にとっては、思わず耳を覆いたくなるような厳しさを持っています。けれども、イエスのこれらのことばは、イエスがその人々の上に立って、いわば高みから語っているではありません。むしろ、イエスはそれらの人々が持つ権威の下に生きる人々と同じ足場に立って、その人々の権威の下に、大地に足を引きずるようにして生きている人々の視点から、権威の

高みにあるこれらの人々への厳しい批判の声をあげているのです。ここにはガリラヤのナザレから出て、枕するところもないというほどの日々の中で、人々の生きて苦しむ暮らしをつぶさに経験してきた、神からの預言者としてのイエスのことばが響いているのです。そしてそれは、自らの十字架の死を決意したイエスの澄み切った心から発せられた、この世の権力の虚偽性に対する断罪のことばでもあるのです。人間が積み上げて作った社会の底の底に生きる人々と同じ立場に立たれたイエスの目に映った、その底辺から見上げるこの社会の滑稽さを見透かしたことばでもあるのです。

けれども、この世の権力の虚偽性を暴くイエスのこれらのことばは、当時のファリサイ派の人々や律法学者たちを断罪するためだけに語られているわけではありません。その人々への仮借のない批判を浴びせるイエスのことばは、旧約の預言者たちが語った、その時代の人々への神の厳しい裁きのことばと同様に、その真の意図は、このような現実を超えて神が望んでおられる真の人間としての生き方と、神が望んでおられる真にあるべき人間同士のお互いのあり方に基づく新しい社会のあり方を目指しているのです。イエスの十字架によってもたらされるはずの、それこそがあるべき神と人間の関係と、唯一の父なる神の下に生きる人間同士のあるべき関係を目指しているのです。

「あなたがたの父は天の父である神おひとりだけだ。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。」という今日の福音のイエスのおことばは、十字架の上になされたイエスが、人々の前で弟子たちに残された最後のことばです。

その弟子たちは、イエスの復活の後に復活のイエスの息吹である聖霊を受けて、イエスによって遣わされた使徒として、最初の教会の指導者となった人々です。その使徒たちの宣教によって、父なる神の子らとして生きる、イエス・キリストを主と仰ぐわたしたちの教会は世界に広がり、二千年の歴史を越えて、わたしたちをもその懐の中に招きいれているのです。その教会の中には、今も、今日の福音のイエスのことばが響いています。わたしたちはイエス・キリストを唯一の主と仰ぐ、父なる神の子らとし生きる者たちの集いである教会の、一人ひとりがそのかけがえのないイエスの弟子と招かれた者たち同士であるのです。

イエスがそれにいのちをかけた、全ての人が父なる神の子らとして大切にされる、その点で上下関係のない、優劣関係のない人間同士の交わりを示す集いとしての教会のあり方を理想に掲げて歩んでゆきたいと思います。そのためには、わたしたち一人ひとりが、今日の福音のイエスの厳しいおことばを常にしっかりと胸に納め、イエスが生きられたように、互いに仕え合う者たちとして、互いに仕え合うことが出来ることに喜びをもって生きる恵みを願いたいと

思います。そのようにして、わたしたちの教会がイエスを唯一の主とした、父なる神の子らとして生きる者たちの集いであることを、社会の上下関係の中にあって苦しむ今の時代の人々の前に示すことの出来る教会として成長することが出来るよう祈りのうちに協力してゆきたいと思います。

教会の中だけに視界を限れば、教会の司祭たちのために祈っていただきたいと思います。わたしたちは司祭の召命の増加を求めて祈っていますが、それよりも大切なことは、一人ひとりの司祭たちが仕える者として与えられているその召命にもっともっと目覚めてゆくように祈ることが、日本の教会において最も必要とされていることのように思えます。わたしたちがその一員であるわたしたちの教会が、イエスが目指された、愛によって互いに仕え合う者たちの、神の子らとしての集いに成長してゆけるよう、今日のミサの中で心を改めて祈りたいと思います。